

わが国における非ステロイド系抗炎症剤(NSAIDs)およびスタチンの習慣的利用の分布に関する研究



溝田 友里、山本精一郎

(国立がん研究センターがん対策情報センター)

e-mail: ymizota@ncc.go.jp (溝田友里)

背景と目的

- 大腸がんなどの化学予防として、アスピリンやイブプロフェンなどの非ステロイド系抗炎症剤(NSAIDs)やスタチンが注目されてきた
- 日本においてもアスピリン投与による大腸がん予防効果を検証する臨床試験が進行中
- 乳がんについても、NSAIDsやスタチンの使用と再発や予後との関連についてデータが蓄積されつつある
Ex. Women's Health Study (Blair 2006), LACE Study (Kwan 2007, 2008)
- NSAIDsやスタチンによる化学予防や再発予防の効果およびその導入を検討するにあたり、そもそも日本にそれらの習慣的・長期的使用者がどのくらい存在するのかを把握することは重要となる
- しかし、わが国において、その分布は明らかになっていない
- 全国の一般住民を対象として、NSAIDsおよびスタチンの利用状況の分布を明らかにすることを目的に調査を行う

方法

モニターを用いたインターネット調査

対象:

性、年代、居住地域の分布を日本の人口分布にマッチングさせた20~79歳の男女8,149人に調査への協力を依頼し、2,170人から有効回答

調査期間:

2010年3月24~26日

調査項目

基本属性、健康状態

NSAIDs、スタチンの使用:

「**習慣的に毎月1回以上**」

使用経験、薬剤名、使用頻度、使用期間、現在の継続の有無

一項目は先行研究や薬の販売実績などを参考に、NSAIDsを使用している研究者や臨床医の協力を得て作成
一秋田県の40歳以上の男女19人および70歳以上の女性乳がん患者16人を対象にパイロット研究を行い、実施可能性を検討したうえで項目を確定

これまでにあなたは、下記の痛みどめや風邪薬など(医師から処方された薬、市販薬)を習慣的に(毎月1回以上)使っていましたか。使用の有無と薬の名称をお書きください。使っていた人は、頻度、期間、現在も使用しているかについて、あてはまるものをお答えください。複数の薬を使用していた場合は、主なものについてご記入ください。

薬の種類	使っていた	使っていない
<痛みどめの薬(頭痛、生理痛、神経痛、腰痛、歯痛など)>		
1. アセトアミノフェン (商品名:タイレノール、小児用バファリン、セデス・ハイ、ピリナジン、カロナール、ナバなど)	1	2
2. アスピリン (商品名:バファリンA、バイエルアスピリン、ケロリン、エキセドリンAなど)	1	2
3. イブプロフェン (商品名:イブA、ナロンエース、ケロリンIBカプレットなど)	1	2
4. ACE処方 (商品名:ノーシン、新セデス、ナロン、ハッキリエースなど)	1	2
5. その他の痛みどめ (商品名:ロキソニン、ボルタレン、セレコックス、ボンタール、インダシ、インドメタシンなど) 注)ステロイド、医療用麻薬を除きます	1	2
<風邪薬>		
6. 風邪、悪寒、咳止め薬 (商品名:PL、ウィックス、バブロン、ベンザ、ルル、エスタック、コルゲン、コウ、アルベン、コンタック、カロナールなど)	1	2
<血栓を溶かす薬>		
7. アスピリン (商品名:バイアスピリンなど)	1	2
8. その他血栓を溶かす薬 (商品名:ワーファリン、ベルサンテン、パナルジン、ブラックスなど)	1	2
<高脂血症の薬>		
9. メバロチン (商品名:メバロチン、プラハコール)	1	2
10. その他のスタチン系の薬 (商品名:リトール、ゾコール/リボバス、クレステール、リハローコールなど)	1	2
11. その他の高脂血症の薬 (商品名:ベザトールSR、リバンテル、コレイバイン、エバデル、ユベラ、ニューニコチネート、シンレスタールなど)	1	2

本研究プロジェクトでの取り組み

- 乳がん患者や一般住民を対象に、生活習慣や代替療法の利用と乳がんの予後やがん発症との関連を検討するコホート研究において、NSAIDsやスタチンの利用についてもデータ収集→関連の検討

【乳がん患者の多目的コホート研究】

- 大規模多施設臨床試験との共同研究として、全国の女性乳がん患者数千人を対象に実施
- 対象者登録とベースラインデータの収集中 (2010年7月13日現在650人登録)

【大腸がん検診RCT参加者コホート】

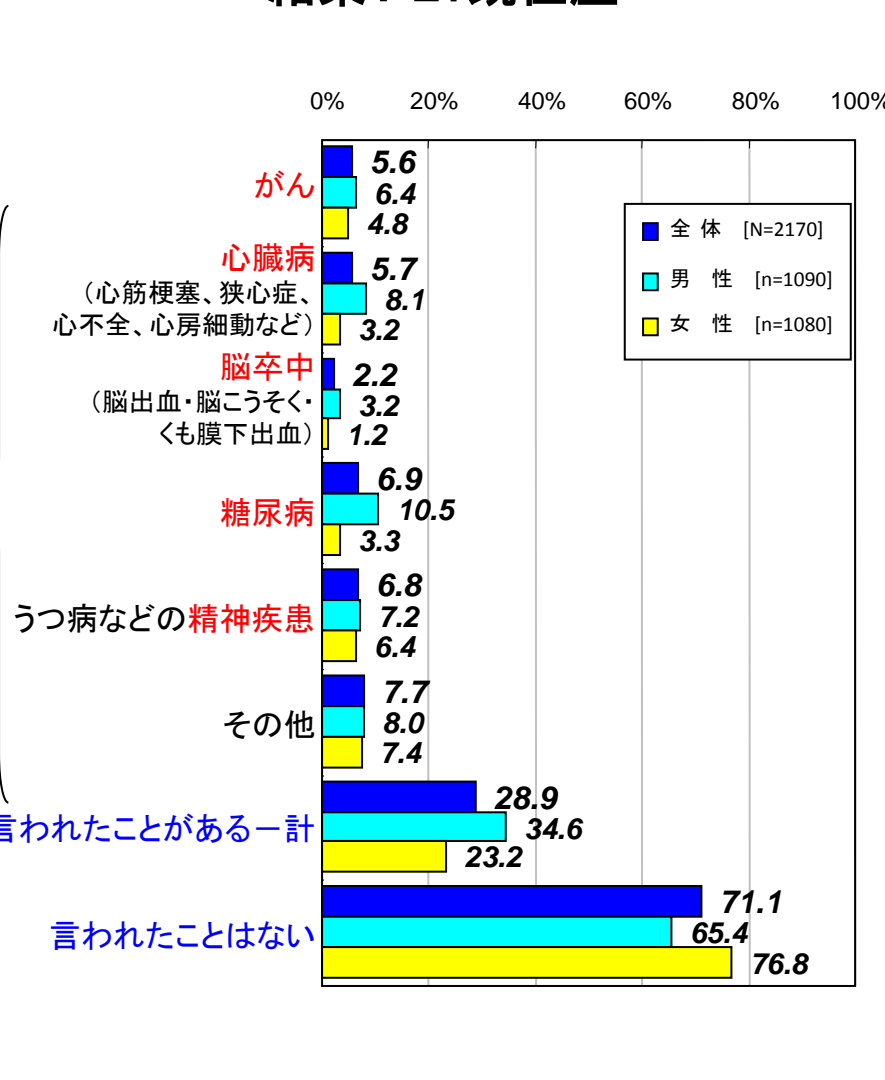
- 秋田県で一般住民1万人を対象に実施している「大腸がん検診における内視鏡検査の有効性のランダム化比較試験」の一部としてコホート研究を実施
- 対象者の登録とベースラインデータの収集中(2009年度は1669人が登録)

回答者の属性

結果1-1: 回答者の基本属性

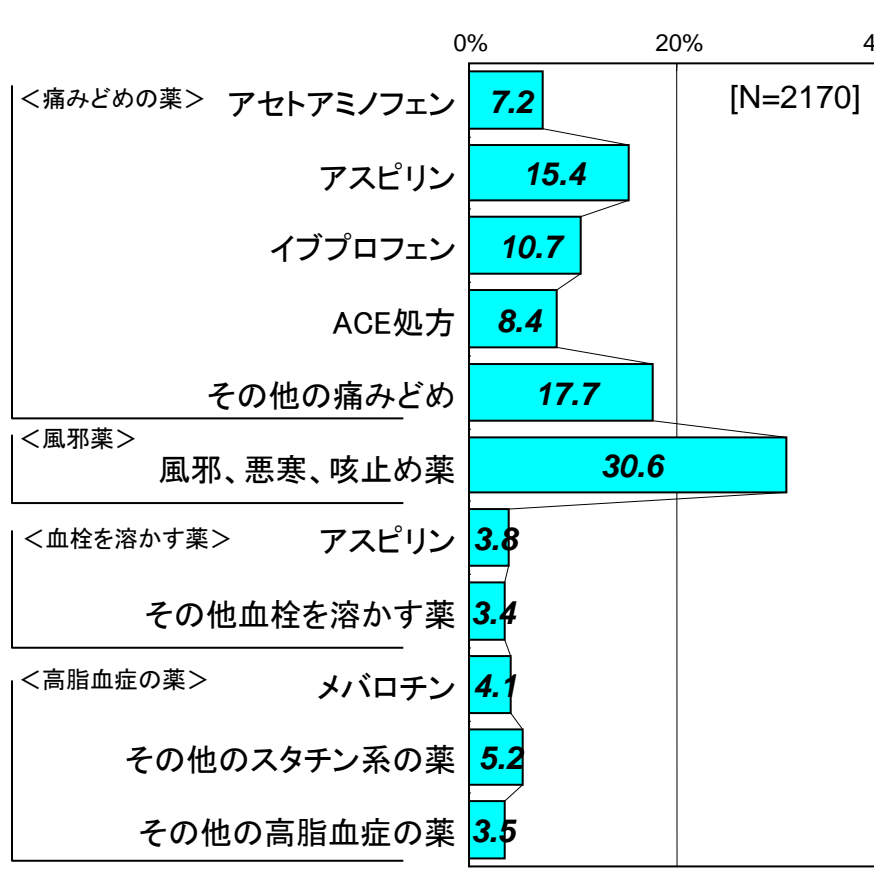
	n	%
性別		
男性	1090	50.2
女性	1080	49.8
年齢		
30歳代	453	20.9
40歳代	424	19.5
50歳代	458	21.1
60歳代	499	23.0
70歳代	336	15.5
居住地域		
北海道	104	4.8
東北	162	7.5
関東	138	6.4
京浜/一都三県	582	26.8
北陸	146	6.7
東海	250	11.5
京阪神	353	16.3
中国	121	5.6
四国	73	3.4
九州	241	11.1

結果1-2: 既往歴



結果・考察

結果2: NSAIDs、スタチン等の習慣的な利用



結果3: NSAIDs、スタチン等の属性別利用状況

属性	痛みどめの薬				風邪薬		血栓を溶かす薬			高脂血症の薬		
	アセトアミノフェン	アスピリン	イブプロフェン	ACE処方	その他	その他	アスピリン	その他	メバロチン	その他	その他	
全体 (N=2170)	7.2	15.4	10.7	8.4	17.7	30.6	3.8	3.4	4.1	5.2	3.5	
男性30代 (n=232)	3.4	12.5	11.2	5.2	17.2	25.4	0.4	0.4	0.9	1.3	0.9	
40代 (n=213)	8.5	21.1	8.9	7.5	20.2	28.2	0.9	0.5	3.3	1.9	4.2	
50代 (n=237)	4.2	10.1	6.3	3.4	13.1	31.6	2.5	3.4	3.0	2.5	2.5	
60代 (n=242)	5.0	12.0	2.9	7.0	12.0	36.4	9.5	7.9	7.9	9.5	8.3	
70代 (n=166)	5.4	13.3	1.8	9.6	22.9	35.5	16.9	16.9	9.0	12.0	10.8	
女性30代 (n=221)	13.6	29.9	27.6	13.1	19.9	30.3	1.4	0.5	0.9	0.5	0.5	
40代 (n=211)	11.4	19.9	21.3	14.2	20.9	29.9	1.4	1.4	0.9	0.9	0.9	
50代 (n=221)	6.3	15.8	16.7	10.4	18.6	27.6	2.7	0.9	2.3	5.4	1.4	
60代 (n=257)	6.2	10.1	3.9	5.1	15.6	29.2	2.3	1.6	7.0	10.5	1.9	
70代 (n=170)	9.4	9.4	5.9	10.6	20.0	32.9	2.9	3.5	6.5	8.2	6.5	
中学校卒 (以下) (n=76)	9.2	14.5	13.2	9.2	18.4	28.9	2.6	6.6	1.3	5.3	3.9	
高校卒 (n=936)	6.5	15.2	11.1	8.2	17.6	29.7	3.4	2.8	3.4	5.4	2.8	
短大卒 (大学中退) (n=332)	8.1	15.7	12.3	9.3	16.9	30.4	1.5	2.4	3.9	5.1	2.4	
大学卒 (n=733)	7.1	15.8	9.1	8.2	17.9	31.1	5.3	4.1	4.8	4.6	4.8	
大学院卒以上 (n=68)	11.8	10.3	7.4	2.9	20.6	35.3	4.4	4.4	8.8	5.9	4.4	

痛みどめとしてのNSAIDsの利用は30~40代女性で多く、血栓を溶かす薬としてのNSAIDsの利用や高脂血症薬としてのスタチンの利用は60~70代男性が多い

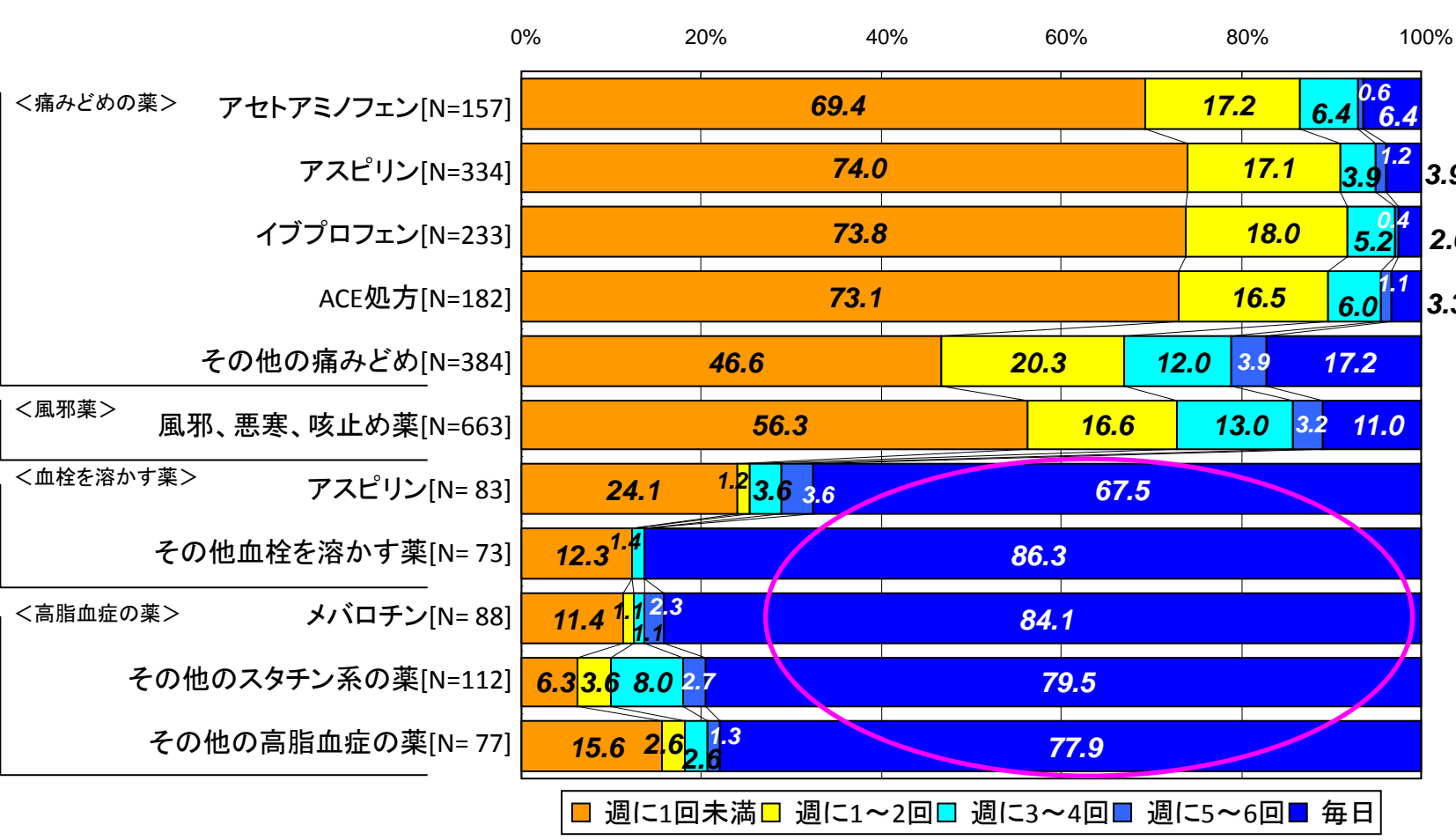
痛みどめとしてのNSAIDsは、利用経験は多いが、頻度は低い(毎日利用も2.6~17.2%)

血栓を溶かす薬としてのNSAIDsの利用や、高脂血症薬としてのスタチンの利用は、利用者の8割前後が毎日利用

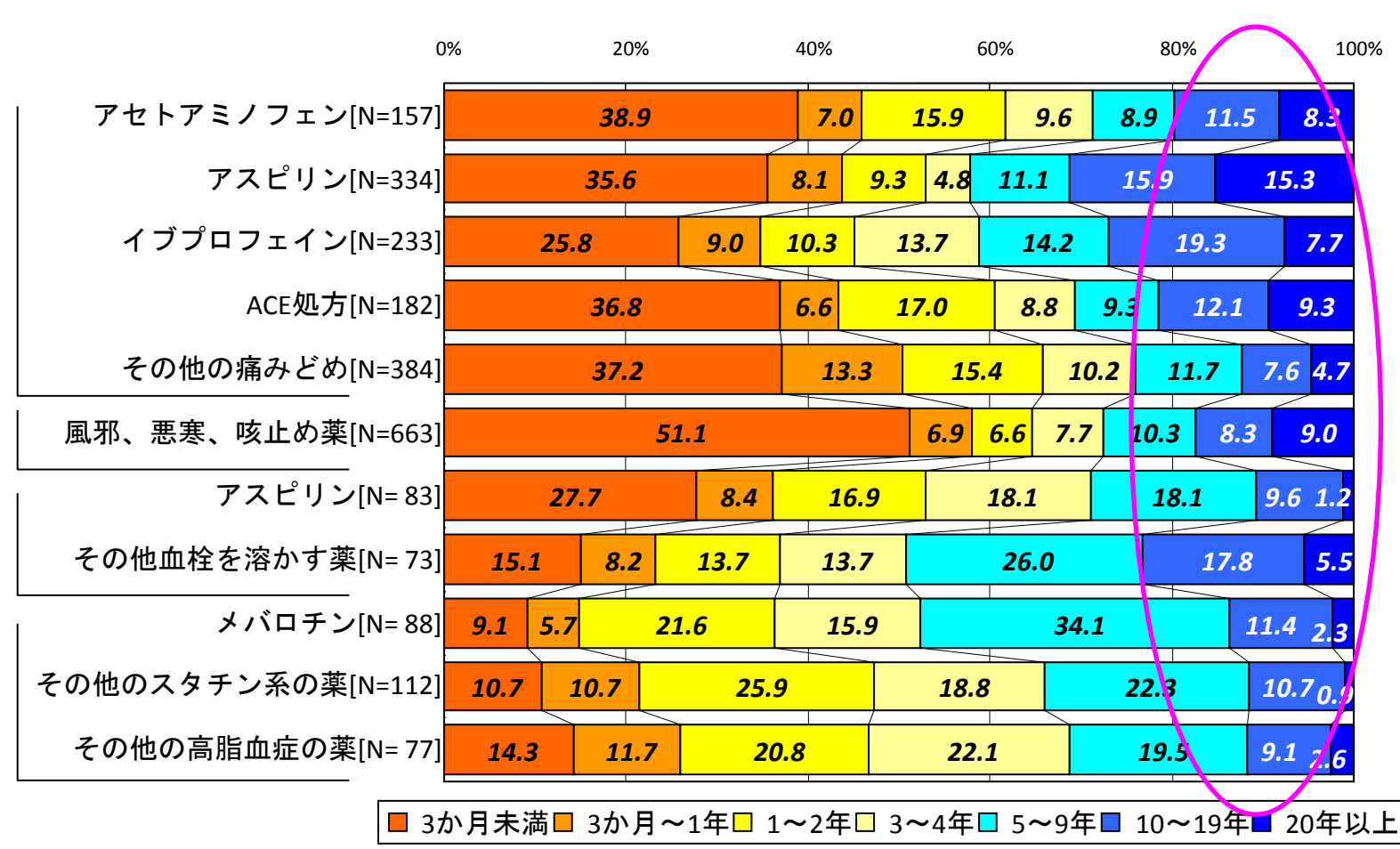
それぞれの薬について、利用者の1~3割が10年以上の長期利用者

利用状況に関して、学歴、地域、職業による大きな違いはない

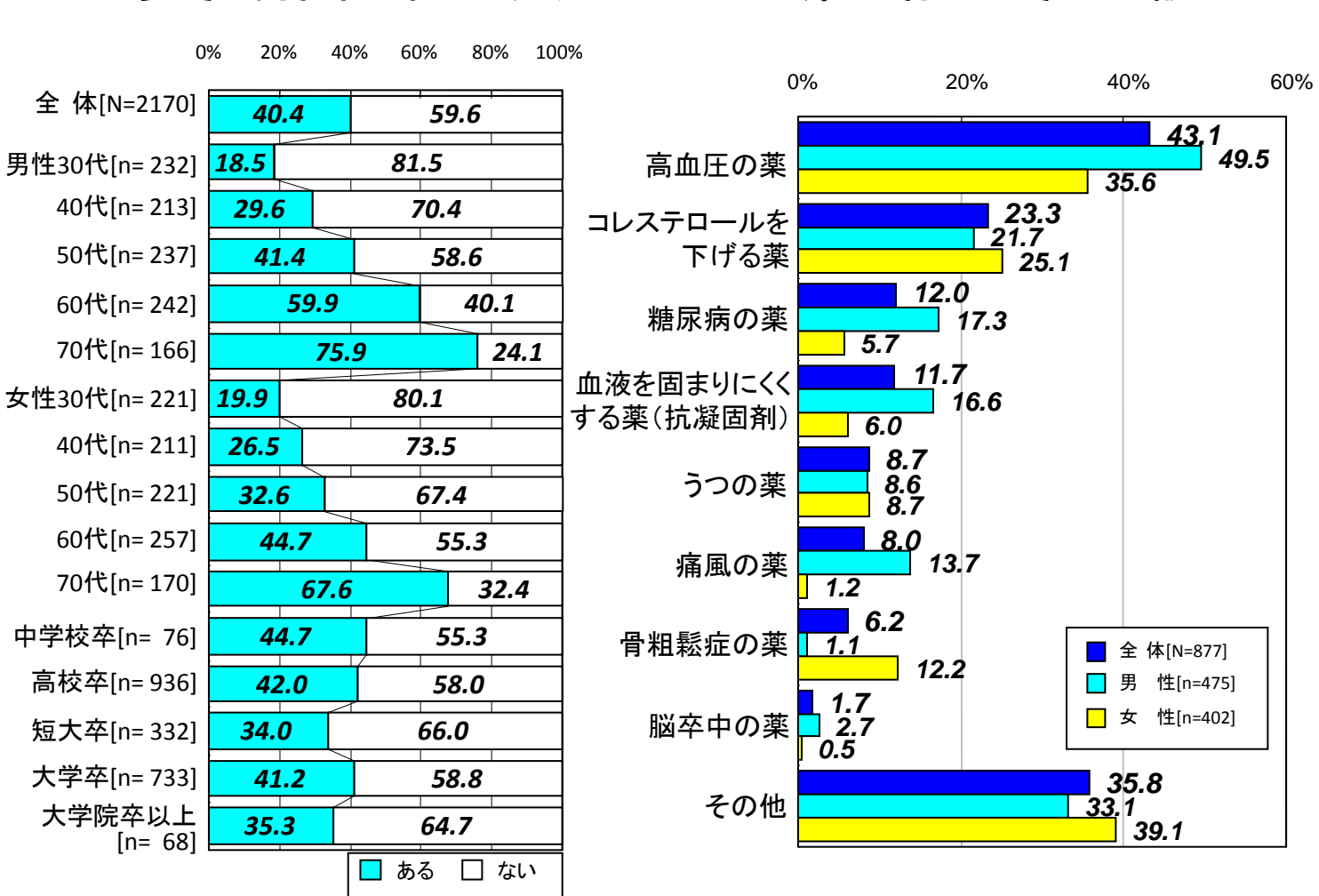
結果4: 利用頻度 (習慣的利用があった者)



結果5: 利用期間 (習慣的利用があった者)



参考: 現在医師から処方されている薬の有無とその内訳



本研究の対象者はインターネットユーザーに限定されているが、インターネット調査における健康状態や一般的な質問項目に関する回答結果の代表性は、先行研究によって示されており、本研究の結果についても、ある程度一般化が可能と考えられる
←質問項目の妥当性については、今後、他の調査で検討予定

本研究により、一般集団におけるNSAIDsやスタチンの習慣的使用状況の分布が明らかになった

- 今後、NSAIDsやスタチンによる、がん罹患および再発のリスク減少効果が実証された場合に、それらが我が国のがん予防や再発予防にどの程度寄与しているのかの推計が可能となる
- NSAIDsやスタチンによるがん罹患および再発のリスク減少効果の検証に必要なサンプルサイズの計算に利用
- 上記乳がん患者コホートにおける分布と一般集団での分布の差を見ることによって、がん罹患してからの利用頻度の変化の検討が可能
- 大腸がん検診RCT参加者コホートにおける分布と一般集団の分布の差を見ることにより、大腸がん検診RCT参加者コホート集団の特殊性(一般化可能性)の検討が可能
- 将来、NSAIDsやスタチンのがん化学予防剤としての利用を検討する際、一般住民における許容の程度や実現可能性の検討のための基礎資料